

エッセイ 田端美華

〔文化一般〕
編集局長兼地域報道本部長



◇たばた・みか

1966年熊本市生まれ。政経部次長や大津支局長、政経部長、文化生活部長を経て3月から現職。2015年から論説委員を兼務。熊本市中央区在住。

書き出しと終わり方

事件事故の記事のように、定まった形というものはない。最も頭を悩ませるのは書き出しと、いかに自然に展開させるかだ。そこで重要になってくる

新聞各紙の1面コラムは、それぞれ歴史があり、名コラムニストと呼ばれる人物もいる。朝日新聞は「天声人語」、毎日新聞は「余録」、読売新聞は「編集手帳」、熊日ならば「新生面」だ。「新生面」は、編集局とは別の論説委員会が担当しており、専任の論説委員もいれば、編集局に所属しながらの兼任もいる。読者の反応は良く、「視聴率」も高い。それだけに、担当日の前日は、兼務歴9年目となる今でも、何を書こうか、どう書くべきか、もん絶するほどの苦しみようだ。

なぜ、それほど苦しむのか。新聞の1面コラムは、一般に言うエッセイとは異なり、基本は「きのう、きょう、あした」の出来事、ニュース対応なのだ。題材は森羅万象。日々起きるホットなニュースや社会的な課題をまな板に載せる。

書き出しがまあまあ満足
のいくものが書けたとして
も、問題は終わり方だ。読
後に余韻を残したい。しみ
じみとしたり、ホロリと涙

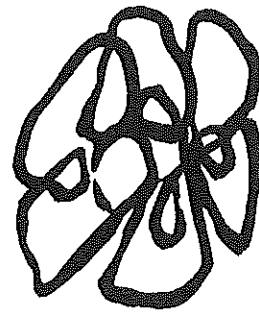
だが、これがなかなか難しい。
まだ論説委員の中でも若
手だったころは、上司が上
手に「軟着陸」させてくれ

新聞コラムは難しい

かつて論説委員長を務め、
名作家として知られた大先
輩は酔っぱらいながら、
「良いコラムってというのは、
最後までスーッと読ませ
なんいかん」と話していた。

のが、読者を一気に引き込
む「マクラ」の存在だ。
「マクラ」の題材は、小説
の一節や詩歌、小ばなし、
著名人のエピソードなどさ
まざまま。マクラから展開し
た視点が、本題の核心へと
無理なくつながらなくては
ならない。

を誘ったり。クスッと微笑
むものもあっていい。そう
いったものが書ければ百点



カット・河田真里

た。しかし、年次も上がり、
先輩が数少なくなった現状
は、そうした「甘え」は許
されず、まさにもん絶する
ことになる。

1970年代、朝日の
「天声人語」を3年弱執筆
し、短い期間にもかかわらず
ず新聞史上最高のコラムニ
ストとも評された故・深代
惇郎さんは、コラムの終わ
り方が絶妙にうまかった。
「文章は流麗で、リズム
があり、スラスラと一気に
読んでしまう。ところが、
読み終わって、すぐには次
へと読み移ってゆくことが
できない。ふーむ、と考え
こんでしまうからだ」。同
僚記者による『深代惇郎の
天声人語』あとがきには、
深代氏のコラムのすごさが
書かれている。あとがきは
こう続く、「そこには強烈
な問題意識がある。(中略)
論理の筋が通っていて、説
得力がある。ユーモアをま
じえ、わきびがきいている。
反骨精神は強いが、人間を
みる眼は温かい」と。

「いまだ山麓」

深代さん以外にも名コラ
ムニストと呼ばれる人は少
なくない。毎日約20年間、
「余録」を執筆した故・諏
訪正人さんもそうだろう。

その諏訪さんでさえ、「会
心のコラムはついに書けな
かった」と、約6300本
の自作コラムを顧みて、そ
う記している。「たどり来
て、いまだ山麓」の思い。
読売で「編集手帳」を長年
執筆し、ミスター「編集手
帳」として名をはせた竹内
政明さんは、諏訪さんの死
亡を扱った「編集手帳」で、
コラムニストとしての自分
をこう表現した。竹内さん
レベルでさえ、「山麓」と
謙そんざれている。

さて、もうお分かりでしょ
うが、私自身が先人の足元
にたどり着くのは夢物語の
世界だ。とはいえ、少しま
も「山麓」に近づけるよう
精進する日々だ。

1年前、県政や経済を担
当する政経部長から、文化
生活部長への異動を命じら
れ大いに戸惑いました。長
い記者生活の中で文化関連
の取材をしたのが皆無だっ
たからです。わずか1年で
異動することになりました
が、取材でお世話になった
多くの文化人の方々には感
謝の念が尽きません。兼務
の論説委員は続けますので、
いつか熊本文化の発展に寄
与するコラムを書きたいと
思っています。